

田村星都

九谷毛筆細字

2022 年 3 月

田村星都独占インタビュー

4月1日から開催の個展に向けて4代目九谷毛筆細字作家の田村星都さんを独占インタビューしました。初めての女性継承者として九谷毛筆細字の伝統を継ぎ発展させていくことの意味、今後の展望についてお聞きしました。



細字萬葉集和歌赤絵香爐

桃青



田村 星都 (たむら せいと)

昭和 55 年 石川県小松市に生まれる

平成 16 年 筑波大学国際総合学類卒業

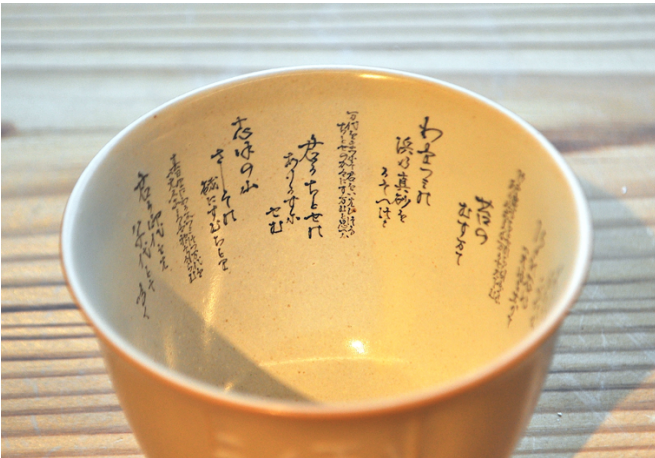
毛筆細字三代田村敬星に師事する

平成 19 年 石川県立九谷焼技術研修所実習科修了

平成 22 年 石川県小松市に工房を構える

—九谷毛筆細字の起源を教えてください。

田村: 細字という技法は中国や京都でもあり、私が今書いている文字よりもかなり大きいものにはなりますが、お茶碗に文字を書くということ自体は昔から行われてきました。その技法が九谷に伝わってきて、初代の小田清山が更に細かい文字でお茶碗の見込みに和歌を書き始めたのが九谷毛筆細字の始まりです。



(写真:古今集賀汲出)

—現在4代目として活躍されていますが、九谷毛筆細字を継ぐきっかけは何でしたか？

田村: 不思議と家業を継がなければいけないというプレッシャーはなかったですね。昔から父には「この仕事は継げといわれてできる仕事かどうかは誰にもわからない。自分で決めるのが最低条件だ。」と言われていたんです。職人というのは今でこそ個展があって、自分の作品をお客さんに見て

桃青

頂くという華やかなイメージもあるかもしれませんが、私が見てきたのは自宅の作業場で朝から晩まで黙々と器に文字を書き込む父の姿だったので、「あれを私もやりたい」とはならなかったんです。もっと華やかな世界に入りたいという思いが強く大学卒業後は東京に行き、営業職につきました。営業職自体はすごくやり甲斐のある仕事だと思ったんですが、一生の仕事として、目に見える、形あるものを世の中に残していきたいと思うようになり、父と話をしました。それで父がやっている仕事はまさにそういう仕事だと言われ、だったらやってみようとなったのがきっかけです。

—実際にお父様に師事されていかがでしたか？お父様は厳しかったですか？

田村: 全然です！うちの父は基本的に何をやってもいいという人でした。ただ「これは趣味とか芸術活動というよりかは生きていく為の職人としての仕事なので基本だけはしっかりしなさい」とは言われました。あとは何でも好きにさせてくれましたし、それは今も変わらないですね。

—実際にうまく文字が書けるようになるには何年くらいかかりましたか？

田村: 九谷焼の細字というのは文字を書ける様になるというだけではなくて、書き込む古典文学の勉強であったり、仮名書と呼ばれる書体の勉強であったり、九谷焼の焼き物としての勉強もあり時間はかかりましたね。24歳から始めて、初めて九谷細字が入った作品を発表したのが31歳の時だったのでそれまでの7年間はずっと修行でしたね。

—その7年の間にくじけそうになったことはありましたか？

田村: 辛いなと思うことは何度もありましたね。でも家の仕事なので家の仕事を一旦始めて、出来ないから辞めるという選択肢は私の中ではなかったですね。いまだに満足に書けているかと言われるとまだまだだと思うんですけど、逆にできないからこそ続けられているんだと思います。

—使われている筆について教えてください

田村: 筆は黒狸の毛を使用したものを特注しています。筆も手作りで個体差があるので、そのままでは上手く描けません。毛量や長さを自分でカットして調節し、書く文字の大きさによって筆を使い分けています。もちろん筆は消耗品なので新しいものに取り替えますが、筆の種類としては曾祖父の時代からの筆を今も変わらず使っています。

桃青

—田村さんの代から造形のプロセスも行うようになったとのことですが

造形時から仕上がりをイメージして作られるのでしょうか？

田村：そうですね。私は造形も行いますが、全てではなく型を使うものもあります。ぐいのみやコーヒークップなど同じ型のものを沢山作りたい時は轆轤士さんをお願いしたものを使います。逆に轆轤士さんをお願いしづらく、自分で細部まで拘りたい作品は仕上がりをイメージして造形のプロセスから行います。

—作品のインスピレーションというのはどこから来るのでしょうか？

田村:基本的には和歌からきます。和歌の内容から作品のイメージを膨らませて制作を行います。

—田村さんの作品には文字があるという事で、作品をただ見るというだけではなく、その文字を読むという特別な時間が流れるかと思うのですが、文字が入っている作品についてどうお考えでしょうか？

田村：とてもいいご質問ですね。文字が入る焼き物自体大変少なく、自分がつくる全ての作品に文字を入れる人っていないんじゃないかなって思っているんです。文様の様に文字を入れる場合もありますが、基本的には仮名書が読める方は読める形で入っていますし、文字というのは模様と違って、細かいですがメッセージ性が強く存在感があるものだと思うんです。例えばこれから桜の季節で、お花見をしながら日本酒を飲むっていう場面がでてくると思うんですがその時にぐい呑を手にとって、口に近づけるその瞬間に桜の絵付けと和歌が目に入る。その時にその文字を読む事によって流れる特別な時間や意味、全てではなくていいのでバランスよく感じ取ってもらえるような作品を作りたいと思っています。

—百人一首のようにぎっしりと書き込み構成するものと文字を疎に配置したデザイン的なものの使い分けはどのような基準で行うのかでしょうか。

田村:細かい文字をぎっしり書くと存在感が強くなりすぎて日常生活に使う器としては相応しくないと思うんです。ぎっしりと文字を書き込むものは、格の高いところに置く香炉や花生が多いです。逆

桃青

に文字と気がつかないように、ひっそりと鉄仙のつたの部分に文字を入れるものもあり、そういうものはコーヒカップやお皿など日常使いする作品が多いです。



(写真:つたの部分に和歌が読み込まれたコーヒの受け皿)

デザインや用途を意識しながら文字の分量や配置を変えています、形と模様と文字の位置を違和感なくバランス良く、どれも必然性をもって配置するというのは最初は凄く難しかったです。和歌というのはだいたい31文字ですが、その入れたい箇所にも足りなくてもダメだし余ってもダメですし、それを計算しながら日々試行錯誤しています。

一先行して送って頂いた香炉は(下記写真参照)文字を書き入れる時間だけでいうとどれくらいかかるのでしょうか？

田村：この香炉全体には書き込んでいる枠が3枠ありますが、一枠あたり約3時間程かかります。正確には測っていませんが(笑) ただ1日で文字を集中して書ける時間はだいたい5-6時間なので、一枠はその日のうちに終わらせられるようにしていますね。



(写真:細字萬葉集和歌赤絵香爐)

桃青

—文字を書くのは一発勝負になるのでしょうか？

田村:ここだけ消すっという事もできない事はないのですが、そうすると遠目で見た時にムラになっているのが分かってしまい仕事がとても汚くなってしまうので、失敗のないように集中して書き切るようにしています。

—初めは文字を間違えてしまう事も多かったですか？

田村:文字を間違えるというよりかは、上下を揃えて四角い枠の中にぴったりと縦一行が例えば和歌一首になるように入れていくのですが、出だしの一文字目の大きさを間違えてしまうと思った所では終わらないですし、20行30行と書き連ねていく中で、漢字、仮名混じりなので全部が31文字というわけではないので、一文字お尻のところが足りない、入らないなどになると四角の枠の下線にぴったり揃わなくなってしまう、やり直しという事はあり本当に苦勞しましたね。これは和歌が頭に入っていないとできない事なので、覚えながら、ちょっとずつ失敗しながら体で覚えていく感じですね。

—田村さんが作られている英字作品について詳しく教えてください。

田村:もともと英字作品を作り出したきっかけというのは、日本語の仮名文字は縦にしか文字が展開できず、いわゆる縦書きしかできないので、デザインにどうしても制約がかかるんです。書く対象物は立体物なので、横に文字を展開していきたいなと思ったのがきっかけで、英語を表記を始めました。日本語と英語とどちらの方が難しいという事はないですが、デザインの印象が大きく変わるので、それを意識して使い分けていますね。

—田村さんの作品は海外でも高い評価を受けておられますが、国によって特性があるのでしょうか？

田村:もちろん国や地域によっても異なりますが、欧米で人気なのは色絵よりも和紙の様に見える釉薬をふきつけた白い作品が人気です。この和紙シリーズはお花やお料理が映えるように、且文字が入っても景色に馴染む様にとという意図を持って作り始めた私の完全オリジナルシリーズとなります。私の印象では欧米の方は工芸品を自分の日常の空間にきちんと取り込む事を想定してお求めになると思うんです。なのでこのシリーズは使い易く且つ和のテイストがあり人氣がでたのだと思います。

桃青

アジアではびっしりと書き込んだ作品の方が人気がありますが、北京や上海といった大都市ではこの和紙シリーズの方が人気であったりと地域によって様々です。



(写真：和紙シリーズ 皿 天の海)

—伝統技法を現代に活かすという観点で特に難しいと感じる事がありますか？

田村：若い頃は仮名書とか和歌とかそもそも現代の人がぱっと見て読めないものを時間をかけて書き込む事に本当に意味があるのかなと思っていました。今でこそ九谷焼の細密って少しトレンドではありますが、世界全体的な流れとしてはインテリアとか建築でもミニマルなものが好まれる傾向にある中で、この書き込むという作品がどう人々の生活に馴染んでいくのかは常に自分の課題として持ちながら制作しています。

そんな思いもあり、和紙シリーズで、同じくらい細密で伝統的な技法を用いながらもさりげなく生活に馴染む作品を実現させる事ができたのは嬉しいかったですね。もちろん逆にぎっしりと書き込む作品もありますし、一つ一つメリハリをつけながら制作をするようにしています。

—今までの作陶活動で特に印象に残っている出来事がありますか？

田村:基本的には個展活動を中心に行っていますが、特注のオーダーを受ける場合もあります。例えばお母さんの誕生日に、長生きできるような和歌を入れた作品を作って欲しいというものがありました。昔は正直に言うと特注というのは辛かったんです。というのはそのお客様の思いを作品に落とし込めるだけの自信がなかったんです。でも最近は和歌の知識も少しずつ増えてきましたし、数をこなしていくことでお客様の要望の形やサイズ、用途に沿ったものを形にする力がついてきたと思っています。なので今は有り難くそういった特注のオーダーを受けれる様になりましたし、一つ一つ思い出に残っていますね。今はこれが自分にしかできないお仕事なんだと実感できるようになりました。

桃青

—今回の桃青京都ギャラリーでの個展に向けてはどのようなお気持ちで制作されてますか？

田村:石川県以外でも年間を通して沢山個展はさせていただいているのですが、京都には今までご縁がなく今回が初めての開催になります。京焼の色絵磁器がある土地ではあるので緊張はしていますが、私が毎日書いている和歌というのが平安時代のものが多く、京都のお公家さんが詠んだ歌や京都の景色を読んだ歌などが沢山あるので、その本場でさせて頂ける事というのはすごく光栄なことだと思いきしく楽しみにしていました。

—田村さんが4代目ですが今後伝統を引き継いでいく事もお考えですか？

田村:うちは一家相伝として代々引き継いできた形にはなりますが、決めていた訳ではなく結果そうなっただけなんです。細字をされている職人さんは曾祖父の時代には沢山いたんですが、今はもう辞められてしまったり、やる人が居なくなってしまうとで、結果私と父だけがやっているという技法になってしまいました。ただ伝統だからそれを残していきたいとか、誰かに継いでもらいたいという気持ちは正直一切なく、あくまでこれは趣味ではなく仕事として成立しないといけないものだと思っています。伝統というだけで残すべきものというよりかは良い作品を作って需要があれば自然と残っていくものだと思うんですね。なのでいずれ私の作品を見て、私が職人として働いている姿を見て、誰かがやってみたいなって思ってもらえるような存在であれたらと思っています。なので血筋とかそんなの関係なく、本当にやってみたいという人がいたら大歓迎です(笑)

—田村先生が今後挑戦していきたいことはありますか？

コロナの影響もあり海外での個展がなかなかできなかったのももう少し海外で発表できたらなっという思いはありますね。でも大きな目標というよりかは、時間をかけて少しずつ少しずつ作品の完成度を高めていけたらなっと思っています。

桃青

田村星都さんのインタビュー記事いかがでしたでしょうか？

現代の生活に馴染むように工夫を凝らした田村星都さんの作品。

作品にこめられた一つ一つのメッセージもぜひお楽しみくださいませ。

田村星都 作陶展は 2022 年 4 月 1 日(金)から 4 月 30 (土)まで開催予定です。

皆様のご来廊お待ちしております。